

【み】 水はどこから、内水氾濫の怖さは辻斬り並み

水にかかわる災害は、津波に始まって土石流、浸水、洪水、氾濫というように多岐に亘っています。水は川や海からくるものと思っていますが、最近、都市災害として多発しているのが内水氾濫というタイプです。普段は水を見ないところですが、地表面がアスファルトなどで被覆されて、降水が地下に浸透されずに一気に地表を流れることで、側溝の容量が間に合わず、河川への流出ができないで逆流して、思わぬ浸水被害が出てきています。そのために、アンダーパスや地下街などで被害が出るということがあります。いまはアンダーパスには注意の看板や、地下街の入口には（防水用）鉄板を挿入する対策も一部で見られます。実際に被害に逢った人の話では、水は一気に来て瞬く間に周りが湖のようになったということです。浸水被害はよく陰湿な被害だといいますが、復旧作業は想像を絶する消耗ものです。

【い】 自然災害は気候変動に関係し、気候変動は健康にも影響する

近年、自然災害の発生回数が増加する傾向にあり、その規模も大きくなっていて被害も多様化しています。これらの状況は気候変動が大きくかかわっていることが指摘されていて、山火事や感染症リスクの増大が医療の現場でも大きな課題になっています。シンクタンク「日本医療政策機構」が日本の医師にアンケート(2023. 11. 21~27)を実施し、その中で「気候変動が人々の健康に影響を及ぼしているか」を質問したところ、「とても感じる」「そう感じる」という回答が78.1%（約8割）だったと公表しています。また、どのような現象が今後10年間で悪影響があるかと考えるかを聞いたところ、洪水や地すべり、山火事といった自然災害による「外傷」が83.3%、熱中症などによる「熱関連疾患」が79.5%、蚊などによる「節足動物媒介感染症」が75.8%の人が回答しています。これらの結果から、医療領域の専門家は相当な危機感を持っていることがわかります。また、国連気候変動枠組み条約COP28では、初めて健康をめぐる問題が議論され、「気候と保健に関する宣言」に123の国と地域が署名しました。自然災害は抑止することは不可能ですので、被害の最小化に向けて、まずは一人一人が気候変動に関心をもって負荷にならない工夫や、協力を実践し続けていくことだと思えます。

【あ】 営力は休むことを知らない働き者

我々が目にする山地や丘陵は地形形成作用というもので形づくられます。最初に地球内部の力によって山地などの大まかな骨格が作られ、その後に浸食作用などによって微細な地形が作られていきます。これらの作用はあるときは大胆で、ある時は繊細というような、まるで彫像でも作っているかのような作用が続きます。大胆のところはプレートテクトニクスや火山活動などの地殻変動と呼ばれています。一方、地表では、風化や浸食といった削剥作用があって、長い時間をかけて地表を整形しています。と同時に、堆積作用も働きます。このように、まさに地表は様々な作用で常に変化、変動しているというわけです。その過程で起きるのが土砂災害で、先に述べた削剥作用の中の崩壊化作用に相当し、地表物質が移動するという現象になります。